

平成23年度研究について

香川県小学校教育研究会国語部会

1 平成23年度研究主題設定とその背景

基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、活用する学習の構築（3年次）
－知識・技能の明確化と、目的意識をもった言語活動の単元化－

私たちは、平成21年度より「基礎的・基本的な知識及び技能を習得し、活用する学習の構築」をテーマに掲げ、新しい時代の教育像を描いてきた。そして、いよいよ本年度、小学校学習指導要領全面実施を迎えた。

その小学校学習指導要領総則編においては、「習得」と「活用」が、今改訂のキーワードとして重要視されている。両者を車の両輪の如く関連させながら子どもの力を伸ばしていくことが求められているのである。

…（前略）…創意工夫を生かした特色ある教育活動を展開する中で、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくむとともに、…（後略）…

（「小学校学習指導要領 総則編 第3章 第1 教育課程編成の一般方針」より）

この新しい時代の幕開けにあたり、私たちには、大きな教育の流れの中で揺れてきた「経験主義」と「系統主義」の止揚が求められているとも言えるだろう。そして、ここ数年来の研究は、まさにそこを見つめようとしてきた。

例えば、昨年度の夏季研修会では、身に付けさせるべき指導事項を明確にした上で「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域を関連させた取り組みや、さらに広く言語生活までを視野に入れた実践提案がなされた。実の場を意識させる単元構成が子どもたちの国語の力に大きく寄与することを実感させる提案であった。

このように知識・技能を明確にし、言語活動を通して、それらを生きて働く力とする。そのスタンスを本年度も引き継ぎ、深化させ、新学習指導要領全面実施に向けて積み重ねてきた研究をまとめていきたい。

それでは、以下、サブテーマにある「知識・技能の明確化」と「目的意識をもった言語活動の単元化」の2点から研究主題設定の背景を具体的に述べていく。

（1）知識・技能の明確化

これまで、ややもすれば、「～をまとめなさい。」「～の気持ちを想像してごらん。」のような活動指示に終わり、そうするための基礎的・基本的な知識及び技能を十分に教えていないことがあった。そのため、説明的な文章にしる文学的な文章にしる、その内容の読み取りがねらいのようになり、国語科としてどのような力が必要なのかが曖昧なまま終わってしまうことも多かったのではないだろうか。私たちが実践にあたる際には、身に付けさせたい知識・技能を

明確にもっておかなければならない。

先に引用した「教育課程編成の一般方針」に示されているように、基礎的・基本的な知識及び技能の習得は、思考力、判断力、表現力等の育成の土台を支えている。ここが揺らいでしまつては、また、「活動あって学びなし」の学習に陥ることも懸念される。

すなわち、「知識・技能の明確化」を図るためには、それを活用することで、どのような思考力、判断力、表現力等を育てようとするのか、その思考力等を育てるにあたり、身に付けさせるべき知識・技能は適切なものとなっているか、それを見据えることが求められているのである。さらにその際、各教科等の言語活動の系統と合わせて分析することで、当該学年、あるいは当該単元で求められている知識・技能がより明確になるだろう。

(2) 目的意識をもった言語活動の単元化

① 目的意識について

言語活動に関して新学習指導要領解説に次のように示されている。

…基礎的・基本的な知識・技能を活用して課題を探究することのできる国語の能力を身に付けることに資するよう、実生活の様々な場面における言語活動を具体的に内容に示す。

(「小学校学習指導要領解説 国語編 第1章総説 2 国語科改訂の趣旨」より)

国語科の学習において、閉じた教材の中で知識・技能を学ばせるにとどまらず、学習者の主体的な言語活動を授業場面に取り入れていくことが必要である。そうすることによって、知識・技能が活用され、生きて働くものとなるのである。国語の学習が、国語の授業の中だけに留まらず、言語生活にまで広がっていく、そのような実の場を意識させることが、より目的意識を高めた言語活動につながるだろう。

基礎的・基本的な知識及び技能を習得しさえすれば、それが豊かな言語活動につながり、よき言語生活者となる、という考えは、短絡的である。むしろ、目的をもった言語活動を通して基礎的・基本的な知識及び技能の必要性を感じ、習得に向かうという流れを大切にしたい。

② 単元化について

文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」(2004.2)において、次のように述べられている。

国語教育の在り方を考える場合の根本的な問題として、日本人の多くが言葉の力を信じていないという指摘がある。言葉によって物事が変わり、また、変えていくことができるという言葉への信頼を学校教育の中だけでなく、社会全体で教えていくことが大切である。

言葉への信頼を取りもどすためにも、目的をもった言語活動を通して言葉が生きて働いたのだという実感のある学習を構築する必要がある。そのためには、一つの題材で閉じる学習では弱い。言語生活とつなぐ必要がどうしても生まれてくる。それが「単元化」である。

単元学習成立の条件として「学習のめあてが学習者の興味・関心・必要に立脚していること、学習を通して学習者の現在および将来に必要な生きる力、学ぶ力がつくこと、聞く・話す・読む・書くなどの言語経験(活動)を通してことばの力がつくこと」ということが挙げられるが、ここに新学習指導要領の趣旨をも見取ることができる。新学習指導要領の理念や内容は、単元学習の理念や内容と重なる部分が多いのである。

2 研究内容

次に、「知識・技能の明確化と目的意識をもった言語活動の単元化」を追究していく際の、本年度の視点を述べていく。

(1) 「知識・技能の明確化」を図る際の視点

① 指導事項の具体化を図ること

授業を通して子どもに育てたい力を考える際、学習指導要領の指導事項が基準となる。例えば、第3学年及び第4学年の説明的な文章の解釈においては、「目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え、文章を読むこと」をおさえることになっている。

しかし、子どもに「中心となる語や文はどれでしょう」と問うても、おそらく答えるのは難しいだろう。教師は、さらに「中心となる語や文をとらえる」には、どのような知識・技能が必要かを把握しておかなければならない。例えば、次のようにである。

- 文末→「～のである」が中心となることが多い
→「でしょうか」など問いかけの文は中心ではなく、答えが中心だ
- ことばの繰り返し→何度も繰り返されていることばが中心となる語だ
→題名と関係のある文が中心だ
- 文と文（段落と段落）との関係→例を挙げている文は中心にはならない
→詳しく説明されている文が中心だ
→理由を述べられている文が中心だ
→「しかし」の後が中心だ
→前の段落にはない説明がこの段落の中心になる
- 筆者の意図→筆者が最も伝えたい内容の書かれているのが中心だ

等

(※ これらの例は、絶対的なものではなく、文脈等様々な要素を加味して判断する必要がある。)

このように指導事項を分析し、具体的な視点や方法を学習していくことで、子どもたちの読みの力は育つのである。

また、言語活動において、育てるべき力を見極めることも重要である。例えば、第1学年及び第2学年の言語活動例に「物語や、科学的なことについて書いた本や文章を読んで、感想を書くこと」、第5学年及び第6学年の言語活動例に「本を読んで推薦の文章を書くこと」が示されているが、これらは、「書くこと」ではなく、「読むこと」の能力を育てるための言語活動例である。活動に感わされて、育てたい力を見失うことのないようにしたい。

② 発達の段階をとらえること

本年度も、まず学習指導要領を基に、その学年で身に付けさせたい知識・技能、そして育てたい思考力等を明確にして実践にあたってほしい。その系統を考える際には、教科書がそれぞれの教材でどのような力を求めているか、また「手引き」でどのようにその教材を扱っているかということが参考になる。東京書籍に掲載されている物語を例に挙げる。

学年・巻	作品名	題材のねらい
1下	『サラダでげんき』	●だれがどんなことをしたかに気を付けて読みましょう。
1下	『花いっぱいになあれ』	●お話の好きなところを選んで、声に出して読みましょう。
2上	『お手紙』	●場面ごとに人物のしたことや気持ちに気を付けて、お話を読みましょう。
3上	『ゆうすげ村の小さな旅館』	●場面の移り変わりに気を付けて読み、あらすじをまとめましょう。
3下	『サーカスのライオン』	●物語の中心となる人物の気持ちの変化を考えながら読みましょう。
4上	『走れ』	●中心となる人物に気を付けて、様子や気持ちを考えながら読みましょう。
4下	『ごんぎつね』	●場面の移り変わりに気を付けて、人物の気持ちの変化をとらえましょう。 手引き＝それぞれの場面で、ごんは、兵十に対してどんな気持ちを持っていましたか。 兵十に対する気持ちは、どのように変わっていったでしょう。
5上	『世界でいちばんやかましい音』	●「設定」「展開」「山場」「結末」の部分確かめて、物語の構成をとらえましょう。
5下	『注文の多い料理店』	●構成や表現の工夫に目を向けて、物語を読み味わいましょう。 手引き＝工夫していると思った表現やおもしろいと感じた表現について話し合ひましょう。
6上	『バラの谷』	●物語が自分に最も強く語りかけてきたことを、自分の言葉でまとめましょう（「設定」「展開」「山場」「結末」をとらえた上で）。
6下	『海のいのち』	●物語に出てくる人物の関係をおさえましょう。 ●物語が自分に最も強く語りかけてきたことについて考えましょう。

これらを俯瞰してみると、授業で着目させたい観点が見えてくる。

例えば、『花いっぱいになあれ』（1下）で求めているのは、物語の一つの叙述に着目した読みである。「ぼくが好きなところは、コンがひまわりの花を見ておどろいているところです。」（手引きより引用）のようにである。それが『お手紙』（2上）では、場面の意識へと広がっていく。場面内の叙述を関連付けてとらえていくのである。それがそれ以降の「場面の移り変わり」の読みの素地となる。中学年からの全体的な視野で物語を読む力へとつながっていくのである。

また、次のような系統を考えることもできる。

第5学年及び第6学年で、登場人物の相互関係をとらえる力が求められている。『ごんぎつね』の手引きでは、その萌芽となる読みの可能性が見て取れる。高学年に向けてどのような授業が可能か、その橋渡しとしての『ごんぎつね』の授業を考えることもできる。

このように発達の段階をとらえ、今、この単元ではどのような力を付けさせたいのか、そのためには、どのような知識や技能を身に付けさせておかなければならないのかを明確にして実践を考えていくことが大切である。

③ 子どもに「知識・技能」を意識させること

小学校学習指導要領総則編に改訂の要点として「見通しを立てたり、振り返ったりする学習活動の重視」が挙げられている。これは、子ども自身に、自分の考える筋道を自覚させることに他ならない。すなわち、子どもたちにも課題解決に働く「知識・技能」を意識させていくことが重要なのである。「こういう考え方を使ったから、学習問題が解決できそうだ。」「物語の構成を知っておくと、こういう時に役立つのだな。」と、その知識・技能の有用性を実感できるようにするのである。教師は、そういった見通しや振り返りの場を学習過程に位置付けておかなければならない。

さらに、学習指導においては、その知識・技能を覚えさせるのではなく、それを考えさせることを重視したい。「書くこと」で言えば、書き方を覚えるのではなく、書き方を考えていくのである。形式的に学ぶのではなく、自分の思いや考えをどう表現すればよいのか、そのよさをとらえさせていきたい。

何のためにこの学習をしているのか。今、学んでいることが、どのような場で生きるのか。そして実際どのように役に立ったのか。子どもたちがそのような学習経験を積み重ねることが、香川の子どものための「国語への関心・意欲・態度」を高めることにもつながるのではないだろうか。

(2) 「目的意識をもった言語活動の単元化」を図る際の視点

単元学習について倉澤栄吉氏は次のように指摘する。

国語単元学習とは何かという問いは、永遠のアポリア（難問）だが、ガイネンから説き出すよりむしろ、子どもの言語生活とは何かという問題から説き起こすべきである。

（倉澤栄吉『解説国語単元学習』1993、東洋館出版社）

時折、習得すべき知識・技能を明確にして言語活動に向かった結果、子どもたちは学習を遂行できたものの、どの子も同じような表現になってしまったということがある。おそらく、「私は、このことを伝えたい。」という目的意識が薄かったためにこのような結果になってしまったのだろう。

この課題を克服するためにも、まず、子どもの思いから学習を出発させたい。言語活動への子どもの思いを醸成した上で、「自分の思いを伝えるにはどうすればよいか」という意識の流れを経て知識・技能の価値をとらえさせていくという方向性を大切にする。

それでは、そのような単元学習を成立させるために、どのような点に留意すればよいのか。以下にその視点を示す。

① 子どもの思いに働く教材開発

子どもの思いを大切にするということは、子ども任せということではない。大村はま氏は、「『興味に即して』とよく言うが、学び手が何に興味をもつべきか、それを教えるのが教師の務めだ」と言われた。子どもたちの興味・関心はもともとあるものととらえず、育てるものである。子どもの思いが言語活動を誘発するような働きかけが必要である。

そのためには、子どもの言語生活全般を教材化の対象とし、実の場を学習に位置付けることが有効であろう。子どものふだんの生活や興味・関心、あるいは他教科等との関連から教材を

開発するのである。また、比べ読みや重ね読みなどのように複数教材を活用するなどの手だても考えられる。

その際、留意しておかねばならないことは、指導事項との関連性を吟味して言語活動を設定するということである。

小学校学習指導要領解説国語編では、「指導事項を言語活動例を通して指導することを一層重視」している。すなわち、単元で育てたい力を子どものものにするために、どのような言語活動が適切かを吟味して実践にあたることが大切である。物語を読んでポスターを作るのなら、それにより、当該単元でねらう力を育てるために、他の言語活動にはない価値がなければならぬのである。

② 言語活動の過程を明確にし、それぞれの過程における評価規準を設定しておくこと

「学習過程の明確化」は国語科改訂の要点のひとつである。

活動が重視されると、活動の結果としての表現に目が向きがちである（「音読が上手にできた」「紹介文が上手に書けた」等）。しかし、例えば学習指導要領「B 書くこと」では、書くことの課題を決める指導事項や、書いたものを交流する指導事項などを設定し、学習過程全体が分かるように内容が構成されている。学習のそれぞれの過程で育てたい力を明確にし、それに対応する評価を行うことが求められているのである。

これを受けて、学習指導においては常に子どもの姿を振り返り、そこから次への指針を得るようにしたい。子どもは、どのような認識をもって授業に臨んでいるのか。授業を通し子どもはどのように変容しているのか。それぞれが、どの程度「知識・技能」を習得しているのか。その「知識・技能」をどのように活用して課題解決にあたらうとしているのか。そのような見取りを継続することで、子どもが見えてくる。すると、子どもも持っている思いを表現に結ぶために、教師はどのような働きかけをすればよいのかがより明確になる。個に応じた学習が展開されるのである。

なお、各領域に示されている指導事項「ア」「イ」「ウ」…を柔軟に組み替え、重点とすべきものを年間計画や子どもの実態に基づいて焦点化しながら学習を構築していく必要があることを付記しておく。

これらのことに関しては、『評価規準作成のための参考資料』（2010、国立教育政策研究所）に詳しい。

③ 言語活動を有機的に結び付けて領域関連を図ること

実の場を意識した単元を構想しようとした時、「話すこと・聞くこと」「書くこと」「読むこと」の領域関連を視野に入れて指導にあたる必要性が生じることもある。実の場の言語活動とは、およそ複数の領域が絡まり合いながら行われているものだからである。本項では、領域を密接に関連させた単元（複合単元）の一例を挙げ、その効果や指導上の留意点について述べていく。取り上げる事例は、『すがたをかえる大豆』（光村図書、3年下）である。

単元を貫く言語活動として設定したのは、姿を変える食べ物についての「調査報告文を書く」（「B 書くこと」言語活動例イ）学習である。その際、「C 読むこと」の言語活動例「イ 記録や報告の文章、図鑑や事典などを読んで利用する言語活動」との有機的な関連を図るようにした。

複合単元を構成するときには、それぞれの領域における指導事項の関連性に着目することが大切となる。本単元では、「B 書くこと」の指導事項「ウ 書こうとすることの中心を明確にし、目的や必要に応じて理由や事例を挙げて書くこと」と、「C 読むこと」の指導事項「イ

目的に応じて、中心となる語や文をとらえて段落相互の関係や事実と意見との関係を考え文章を読むこと」の関連性から、重点を置くべき指導内容を「中心となる語や文をとらえること」と設定した。そうすることにより、食べ物についての調査報告文を書く際には、知りたい情報の中心となる語や文をとらえて読む過程と結び付き、「書こうとすることの中心」を一層明確に意識付けることができるようになると思った。また、調査報告文を書くという目的を明確にもつことで、「中心となる語や文」を一層主体的にとらえて読むことができるようになるであろう。

以上、「知識・技能の明確化」と「目的意識をもった言語活動の単元化」から、本年度の研究の視点について述べてきた。「知識・技能の明確化」は系統主義的な視点である。「目的意識をもった言語活動の単元化」は経験主義的な視点である。これまでの「経験主義と系統主義の止揚」をさらに深化し、3年間の研究をまとめていきたい。

3 年間計画

月	年 間 の 見 通 し
2	○ 事務局会・研究推進部会 ・次年度香小研テーマ，研究内容等 ・各郡市の提案単元・学年について
5	○ 総会・理事会 ・研究主題，研究内容等 ・夏季研について ・実践発表における留意点
6	○ 夏季研の打ち合わせ
7	○ 夏季研
8	○ 夏季研で発表した資料，成果と課題をデータで事務局へ
9	○ 夏季研の反省
11	○ 四国大会（25日） ○ 研究推進委員会 ・来年度香小研テーマ，研究内容等 ・夏季研のもち方 ・夏季研における各郡市の提案単元・学年について
2	○ 事務局会・研究推進部会 ・次年度香小研テーマ，研究内容等 ・各郡市の提案単元・学年について

4 平成23年度の夏季研修会について

日時 平成23年7月26日(火) 9:30~16:00

場所 附属高松小学校

時間	研修内容等	備考
9:10~9:30	受付・弁当食券販売	
9:30~9:40	開会行事<恵心館> (香小研国語部会長挨拶・日程説明等)	・最初から恵心館 1Fと2Fに分かれる。 ・映像を送る。
9:40~10:10	香小研研究テーマ発表 (香小研国語部会研究部長) 平成23年度四国大会テーマについて (東かがわ市立本町小学校)	
10:10~11:40	研修Ⅰ (大単元:前半40分-10分-後半40分) ○ 小豆(6年) ○ 三豊・観音寺(2年)	・参会者の移動が 困難であるため 提案者(指導者) が移動をする。
11:40~12:40	昼食・休憩	
12:40~13:20	研修Ⅱ<恵心館> ○ 分科会A:高松 ○ 分科会B:丸亀	
13:50~14:05	指導 香川県教育委員会義務教育課	・移動の混乱を避 けるため、先に ご指導
14:20~15:50	四国大会提案授業指導案検討<各教室> (低・中・高学年部会に分かれて)	・もち方の具体に ついては検討中
15:50~16:00	閉会行事 (香小研国語部会副会長挨拶・事務連絡)	・放送による閉会 行事

※恵心館1F270名, 2F150名収容可能